

集めて
使う
リサイクル

協会報

春
号

2006.4
Vol.25

特定非営利活動法人／集めて使うリサイクル協会

〒541-0043 大阪市中央区高麗橋1-3-4 小池高麗橋ビル TEL.06-6209-7155 FAX.06-6209-6685 (東京連絡事務所) TEL.03-3360-1301 FAX.03-3360-7090

アルミパックリサイクルキャンペーンを実施

(2005年度地球環境基金助成事業)

当協会では、2005年度地球環境基金助成事業として、アルミパックのリサイクルに関するキャンペーンと事例集の作成を行いました。酒パックを消費者の方に集めていただき、枚数に応じて再生紙トイレットペーパーなどを進呈する商品キャンペーンで、実施地域は静岡市、大阪府高槻市、兵庫県朝来市・養父市、熊本市、宮崎市の5か所。いずれも、小売酒販組合などが積極的にこの取り組みを推進している地域です。以下、各地域でのキャンペーンの概要についてお知らせします。

また、右のような「アルミパックリサイクル事例集」を作成しました。さまざまな方法でアルミパックのリサイクルに取り組んでいる自治体や福祉作業所、酒販店などの事例を紹介したものです。ご希望の方には無料でお送りしますので、当協会までご連絡ください。



■キャンペーンの概要

<キャンペーンの方法>消費者は、各地域の「エコ酒屋」登録酒販店に、飲み終えた酒パックを持ち込みます。1.8～2リットルの紙パック1枚につき応募シールを1枚進呈し、10枚集めると再生紙ティッシュペーパー1パック、20枚集めると再生紙トイレットペーパーを差し上げます。(※高槻市の場合は、酒パックの回収が市の委託事業となっているため、商品キャンペーンはありません。)

<告知の方法>裏が応募シールの台紙となっている告知チラシを作成し、新聞折込みでそれぞれの地域に配布しました。

<キャンペーン期間>2005年11月から2006年2月までの4か月間。なお、各地域ともキャンペーン期間の終了後も酒パックの回収は継続して実施しています。

■各地のキャンペーン報告

1. 静岡市

静岡小売酒販組合では、加盟する294軒の酒販店のうち、地域ごとに割り振りを決めて市内全域にエコ酒屋が分布することを目標にしています。現在は21店舗が登録しており、当面100店舗の登録を目標に、働きかけを行っています。

事務局の話によると、「酒パックを集めれば景品がもらえるというキャンペーンは、酒販店からお客さんに向けて呼びかけやすくなるという効果がある。また、特に業務店から酒パックを集めている酒販店からは、『こういうキャンペーンをやってくれると助かる』という声が上がっている」とのことです。一方、課題としては、「もともと酒パックを買うお客さんというのは、びんで買うとお店に戻るのが面倒だからという理由で酒パックにしている面もあるので、わざわざ店まで持ってきてくれる人は少数」と、協力してくれる消費者がまだまだ少ないことを挙げています。

2. 高槻市(大阪府)

高槻酒類調味食品事業協同組合は、数年前からガラスびんの回収・リサイクルを、高槻市からの委託事業として実施しており、今年度はその一環として酒パック及びペットボトルのリサイクルにも取り組むことになりました。市民に回収への協力を呼びかけるチラシも、同組合と高槻市が共同で作成しました。

同組合の西田直弘理事長は、「回収ボックスがごみ箱のように使われるのではないかと心配があったが、実際に始めてみるとそのようなことはなかった。ただ、参加していない酒販店はやはりそういった懸念を強く持っているため、今後も粘り強く働きかけていくことが必要。とりあえず3月末までは試行期間として考えている。新年度から、総会で承認が得られれば本格的に酒パックのリサイクルに取り組みたい」と話しています。また、高槻市環境事業室では、「組合が本格的に取り組むということであれば、酒パック回収店舗を広報で紹介するといった啓発面での支援は可能。市の委託事業として実施してもらっているので、息の長い取り組みを期待している」とのことです。



西田理事長の店舗にも回収ボックスを設置。

3. 朝来市・養父市（兵庫県）

兵庫県北部の朝来市・養父市をエリアとする南但小売酒販組合は、2005年4月から一部の酒販店で回収ボックスを設置しています。キャンペーンのチラシについては、市会議員の仲介により朝来市が協力してくれることになり、市広報の配布ルートを活用して全戸配布を行いました。読売新聞地域版にも、この取り組みを伝える記事が掲載されました。

率先して回収を行っている同組合の和田秀樹専務理事は、次のように成果と今後の抱負を語っています。

「キャンペーン前は個々の酒販店が顧客に訴えていた程度で、啓発には限度があった。チラシを行政の協力で全戸配布してもらったことで、より多くの市民が酒パックの回収について知ることができ、店頭で回収ボックスに酒パックを入れていく人も増えた。今まではほとんど開いていないパックだったが、キャンペーンが始まってからは開いて洗って持ってくる人も増えた。また、酒販店の側も、これまでは儲からないことはしないという風潮が強かったが、『売った商品の空き容器を回収するのも酒販店の責務』という社会的な意識が高まった。新年度は、より多くの市民に浸透させていくとともに、1件でも多くの酒販店が参加するよう呼びかけをしていきたい。」

4. 熊本市

各店舗で集めた酒パックは熊本小売酒販組合に集約され、ある程度たまった段階で熊本障害者労働センターが引き取りに来ています。熊本市は広報誌においてエコ酒屋の一覧を紹介するなど、市民啓発に協力しています。

同組合の中山紀雄理事長は、「酒パックのリサイクルを進める上での大きな課題は、環境問題などに興味の薄い消費者に関心を持ってもらうこと。その意味では、景品付きのキャンペーンはいいきっかけになる。ただ、費用対効果を考えると、今回のキャンペーンは反応が鈍い。やはり大量生産大量消費の社会で育ってきたお客さんが多いので、酒パックをごみとして捨てることをもったいないと感じないのではないか。多くの方が『リサイクルはいいことですね』と言うが、それが行動に結び付かない」と課題を指摘しています。

現在、熊本市でごみの有料化が検討されており、組合では「実際に有料化が実施されればごみ減量の観点から酒パックの回収が促進されるかも知れない」と期待しています。

5. 宮崎市

宮崎小売酒販組合に加盟する45店舗がエコ酒屋に登録しており、日本一回収店舗が多い地域です。同組合では、「キャンペーンの景品がけっこういいので、お客さんには喜んでもらっている。キャンペーンが始まってから、『どこの酒屋に持っていったらいいか』といったお客さんからの問い合わせも増えている」と一定の効果を認めています。ただ、「今回のキャンペーンは自分のお店で買った商品でないものも対象になるので、直接的な販促に結び付いていない。商品の方にシールを貼って、それを何枚か集めたら景品を進呈するという形であれば、お店で商品を買った人がキャンペーンに参加できる形になるので、次回はそういったことも検討してほしい。シールは、それぞれのお店で適当にキャンペーン対象商品を決めて貼ればよい」と提言しています。



店舗の入り口付近に置かれた酒パック回収ボックス。

第11回酒パック・リサイクリング問題研究会報告

と き：平成18年3月9日（木） ところ：日本酒造会館 8階会議室（東京都港区）

参加団体：国税庁、日本酒造組合中央会、オエノンホールディングス、霧島酒造、月桂冠、三和酒類、宝酒造、日本盛、白鶴酒造、全国小売酒販組合中央会、印刷工業会、アイピーアイ、大日本印刷、東京製紙、凸版印刷、日本紙パック、日本テトラパック、北越パッケージ、紙製容器包装リサイクル推進協議会、集めて使うリサイクル協会 計20団体33名

今回の酒パック研は、日本酒造組合中央会・印刷工業会液体カートン部会・集めて使うリサイクル協会の3団体が共催として呼びかけを行いました。容り法見直しの概要も明らかになった時期でもあり、各社とも関心を持って今まで以上に多数の団体の参加を見ました。

まず印刷工業会から「容器包装リサイクル法見直し最新情報」が、そして紙製容器包装リサイクル推進協議会から「経団連の3R推進自主行動計画と紙製容器の取り組み」が報告されました。

見直し論点になっていた拡大生産者責任の徹底による分別収集、選別保管の事業者一部負担については、今回組み込まれなかったものの、事業者の自主行動計画を明らかにしてゆくことが責務になる旨の説明があり、関連事業者の個々の取り組みの重要性が指摘されました。

また、今年度全国5地域で展開した「酒パックリサイクルキャンペーン」の取り組みを、集めて使うリサイクル協会から報告。全国小売酒販中央会には、今後全国の酒屋に向けて、可能な形でエコ酒屋の取り組みを情報発信していただくことになりました。

日本酒造組合中央会からも、業界として具体的に動き出していかなければいけない状況になってきている旨の説明があり、当研究会への各社の参加要請が行われました。

今回を契機にして、各団体の連携の下、今後の展開に大きな期待が持てる研究会になっていくものと考えます。



「びん容器」 生き残りを賭けて新たな挑戦

㈱ウエダ事業本部（集めて使うリサイクル協会理事） 磯村 佳宏

●紙パック・ペットボトル・缶に大きくシフトした容器素材

集めて使うリサイクル協会は、協会発足の経緯から「紙パック」容器のみを取り上げている協会と置いていましたところ、協会報でびん容器を取り上げたいとのことで私にお鉢が廻ってきました。確かに、全ての容器素材の実情、現状を知った上で紙パック容器の今後を考察することも大いに必要なことだと、依頼の思惑を理解いたしました。

さて、びん容器ですが、誰でもが周知の通り、社会はびん容器以外の容器素材に大きくシフトしています。代表的なものでいうと、①牛乳は紙パックに、②清酒は紙パックに、③醤油はペットボトルに、④ビールはアルミ缶に、⑤清涼飲料はアルミ缶・スチール缶・紙パックにと、それぞれ変わってきています。

特に、リユースの優等生と言われてまいりました牛乳・清酒・ビールびんも、現在では完全に主役の座を上記容器素材に譲っています。

具体的にどのような数値変化をしているか、平成9年頃までは把握をしていたのですが、あまりにも減少の度合いが激しすぎて、現在は数値把握をしていません。数値変化は伸びている時は張り合いがあるのですが、減少変化ばかりでは気乗りもしませんので、ついおろそかになってしまいます。

●生協から始まった統一リユースびんシステム

では、衰退の一途を待つだけの状態かといいますと、そうではありません。

リユースびんの新たな芽も育っています。それは、生協を中心とした「統一リユースびんシステム」です。生協の組合員さんが、地球環境に優しい容器素材を、びんとし環境負荷の最も小さいびん容器のリユースを選択しました。

このシステムは、平成6年に東京の3生協によってスタートし、平成18年現在では7生協で採用されています。具体的内容は、次のとおりです。

1. リユースびん種類は7種類（右写真参照）

- ・ 900ml 細口（醤油・清酒・味噌等）
- ・ 500ml 細口（醤油・つゆ等）
- ・ 400ml 中口（ケチャップ等）
- ・ 360ml 細口（ソース・ポン酢・醤油等）
- ・ 350ml 広口（蜂蜜・ジャム・梅干等）
- ・ 200ml 中口（焼肉のたれ・ドレッシング等）
- ・ 200ml 広口（のり佃煮・ジャム・山菜等）

<全て丸びんの透明>

2. 組合員数—平成18年142万人

3. 年間供給本数—平成18年1500万本

（うち、回収本数は1050万本、回収率70%）

4. 自治体回収費用15億円（平成7年からのトータル削減効果）

5. CO2削減15,000トン（平成7年からのトータル削減効果）



●「安心・安全」で美味しいびん容器食品

以上のように、この新しいリユースびんシステムは、びんリユース事業者にとりましても企業存続の要となりつつあります。

そして、なによりもびん容器の食に対する「安心・安全」はもとより、びんに入ったものは美味しいと言われる食文化を構築したいものです。

さらに、環境破壊に代表される地球環境負荷を少なくし、地方行政の財政負担を軽減することができるのです。

会員募集中！

入会金は不要です。循環型社会構築を目指す私達の仲間になってください！

会員区分	年会費（非課税）
団体	正会員 60,000円
	賛助会員 10,000円
個人	正会員 6,000円
	賛助会員 1,000円

当協会ホームページでは、会員企業の参加によるリサイクル商品の販売も行っております。（お買い得の月替わり SALE 商品もあり！）どうぞご利用ください。

<http://www.r-kyokai.org/>

平成18年度 集めて使うリサイクルセミナーのお知らせ

と き：平成18年5月26日（金）

14:00～16:30

ところ：大阪産業創造館

6階 会議室A、B

（地下鉄中央線・堺筋線

「堺筋本町」駅下車）

資料代：2,000円

主催：特定非営利活動法人

集めて使うリサイクル協会



容器包装リサイクル法も施行から10年が経ち、見直しが行われる中で排出事業者の果たすべき役割もさらに重要になってきています。また個人情報保護法等によって事業者の機密文書が増大し、その処理費も今後さらに拡大していくものと思われます。

今回のセミナーでは、増え続ける紙ごみ（とりわけ大阪市等関西の大都市圏における紙ごみ）の実態を検証すると同時に、効率的に資源としてリサイクルする仕組みを考えていきたいと思えます。

<進行案>

(1) 主催者あいさつ

(2) 基調報告 「容器包装リサイクル法見直しの概要」

農林水産省総合食料局食品環境対策室 室長 西野 豊秀 氏

容器包装リサイクル法の立案に直接関わった立場から、その意図するところ、及び見直しによって事業者の果たすべき役割について語っていただきます。

(3) シンポジウム 「機密文書の紙資源としての効率的リサイクルにむけて」

コーディネーター 大阪府立大学大学院 教授

NPO法人 ごみゼロネット大阪 代表 惣宇利 紀男 氏

大阪府市政改革本部にも関わり、同時にNPOとして大阪のごみ問題に取り組んでおられる立場から、各発言者の意見を引き出し、大阪の紙ごみをどう効率的にリサイクルするか整理していただきます。

※予定発言者・「関西圏の古紙実態」 古紙ジャーナル 発行人 本願 静雄 氏

永らく古紙を追いかけてこられた立場から、関西圏の古紙事情についてデータを軸に全般的な話を伺います。

「機密文書リサイクルの実情」 大和紙料(株) 専務取締役 塩瀬 宣行 氏

古紙問屋として、実際に機密文書リサイクル事業を展開しておられる立場から、その実情、問題点などをお話しいたします。

「自治体の機密文書処理」 大阪府の自治体（未定）

自治体の処理の現状についてお話しいたします。

「企業の機密文書処理」 関西の主要企業（未定）

企業の処理の現状についてお話しいたします。

「ビルからの機密文書」 関西の主要ビル管理会社（未定）

ビル管理の立場から、その現状をお話しいたします。

※発言者については、今後調整の上、決定させていただく予定です。

<お問い合わせ・お申し込みは>

特定非営利活動法人集めて使うリサイクル協会

電話／06-6209-7155 ファックス／06-6209-6685

メール／info@r-kyokai.org